あたたかかった手

「ゆっくり深呼吸してください ね」麻酔科の先生はそう言って、私の左肩に手をそっと数秒置いた。その時の手の温もりを私は一生忘れることができないと思う。

あれは初夏の出来事だった。検診で病気が見つかり、入院して全身麻酔で手術することに急に決まったのだ。それまで大きな病気や怪我なく生きてきた私にとっては、何もかもが不安で仕方なかった。

手術前日、病室のベッドで休んでいると、2人の麻酔科の先生が来た。問診を受け、麻酔の説明を聞き、同意書にサインした。不安だらけの私は、麻酔から覚める時はどんな感じか、管を抜く時は痛くないか等、気になっていた事を何点も質問した。きっと同じような質問を他の患者さんからも沢山されている だろうに、麻酔科の先生は嫌な顔をせずに丁寧に優しく対応してくれた。2人が「明日は よろしくお願いします」と言ってくれた時、

私はこの人達がいてくれたら大丈夫だろうと気持ちを落ち着かせることができた。

とは言っても、初めての手術は怖い。夜は殆ど眠れず、手術当日になってからも予定時刻が近づくにつれて恐怖が増していった。そしていよいよ手術の時間。テレビでしか見たことがないような、大きなライトが照らされた手術室に入り、冷たくて無機質な手術台に腰掛ける。何人もの手術に携わる方達に囲まれ、名前や生年月日、術式の確認をする。勿論その中には前日に顔を合わせた麻酔科の先生がいた。確認が済むとすぐに横たわるように言われ、速やかに麻酔の準備がされた。顔には酸素マスクが当てられ、左手には点滴が入れられる。手術室の天井を見つめながら、これから始まる手術のことを考えていると急に孤独になり、無言ながらも涙が溢れた。ちょうどその時だろうか。麻酔科の先生の1人が私の左肩に手を置き、「ゆっくり深呼吸してください」と一言呟いた。なんて温かい

のだろう。ほんの数秒であったが、私にとっては安心感が永遠に続くように感じられた。

それから何時間過ぎただろうか。「○○さん手術終わりましたよ」の声で目が覚めた。

ああ手術は終わったんだと感じると同時に、自分の顔のすぐ左横に麻酔科の先生がいることに気づいた。術中もずっとこうやって見ていてくれたのだと分かり、心から安心した。

術後、麻酔の副作用が無いか麻酔科の先生が確認しに来てくれた。これが麻酔科の先生に会う最後の時間だ。今後は会えないことに悲しみながらも、私は精一杯感謝を伝えた。

手術というと執刀医に目が行きがちだが、麻酔を受けたことのある人なら麻酔科医の偉大さが分かるはずだ。術中、意識がない私達は麻酔科の先生の手で生かされる。そして術中だけではなく、その前後にも見えない所で私達を支えてくれている。周術期にのみ関わる麻酔科医は、私達患者の1番の代弁者だ。あの手の温もりを忘れずに生きていきたい。